トムラウシ南沼野営指定地トイレ問題について
汚名返上プロジェクト３年目の活動報告と今後の取組

牛嶋　あすみ（北海道十勝総合振興局保健環境部環境生活課自然環境係）

【トムラウシ山南沼野営指定地の現状とこれまでの対応】

トムラウシ山南沼野営指定地はトイレ問題が深刻であり、排泄物の放置とティッシュペーパーの散乱が常態化していた。野営指定地の外側にいわゆる「トイレ道」が複数できており、高山植物が失われ、裸地化した道は土壌浸食が起こっている。登山客はトイレ道を利用することに抵抗感や罪悪感を持たないことから頻繁に利用され、結果としてトイレ道はどんどん延伸化していくという悪循環ができあがってしまう現状が続いている。

携帯トイレ普及の動きは以前から始まっており、北海道としては、平成 12 年から平成 16 年に宿泊施設や山岳ガイドに依頼して、登山者へ携帯トイレを無料配布した。

また、平成 14 年には南沼野営指定地に携帯トイレブースを１基、登山口に使用済み携帯トイレ回収ボックスを２基設置した。しかし、その後、継続的な取組がなされず、携帯トイレの利用が定着しなかったことから、トムラウシ山のトイレ環境はさらに悪化してしまった。

（H14 北海道設置の
南沼野営指定地トイレブース）

（南沼野営指定地トイレ道）
※ 岩陰へ向かう長い道が続いていた。

【トムラウシ山汚名返上プロジェクトの立ち上げ】

平成 29 年４月 17 日に大雪山国立公園の新得地区における登山道を維持管理する協議会に山岳トイレ環境を専門に考える部会を設置し、継続してトイレ問題に取り組んで行く「トムラウシ山汚名返上プロジェクト」が始動した。部会のメンバーは、環境省上士幌自然保護官事務所、林野庁十勝西部森林管理署東大雪支署、北海道上川総合振興局、新得町、十勝山岳連盟、新得山岳会、山のトイレを考える会、北海道十勝総合振興局をもって構成している。

【汚名返上プロジェクトの活動】

汚名返上プロジェクトでは、携帯トイレの利用推進により南沼野営指定地のトイレ問題解決を図るため、平成 29 年度から令和元年度にかけて、プロジェクトメンバーの協働により、次の活動を実施した。

① 普及啓発活動
② ティッシュ痕回収作業
③ トムラウシ山南沼野営指定地利用者に対するアンケート調査
④ 南沼野営指定地の設営テント数調査
⑤ 携帯トイレブース利用状況調査
⑥ トイレ道の植生復元活動
⑦ 携帯トイレブースの増設

（１） 普及啓発活動

登山者に取組を PR し、理解を深めていただくことで、南沼野営指定地における携帯トイレ利用の促進を図ることを目的に実施。

○ チラシ・ポスターの作成
○ のぼりの作成
○ 周辺施設における携帯トイレの販売開始
○ 各機関のホームページ等によるＰＲ

〈普及啓発活動の状況〉

チラシ・ポスター、のぼりについては、次のとおり作成し、普及啓発に活用している。

（ポスター・チラシの原稿）

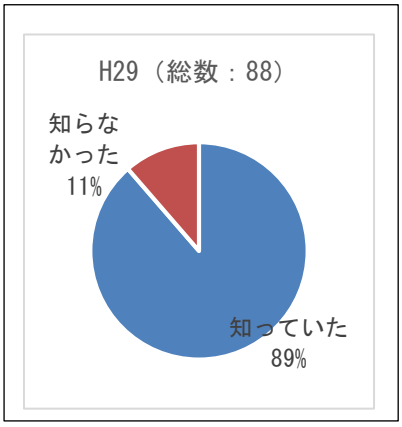
（作成したのぼり）

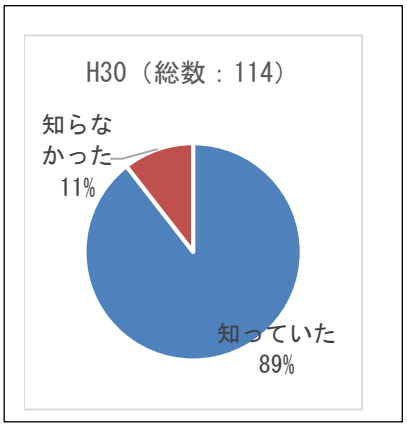
「トムラウシ山では携帯トイレの利用をお願いしていることを知っているか」というアンケートを登山者に対し実施したところ、「知っている」と回答した登山者は、平成 29 年度、平成 30 年度は 89%であり、令和元年度はさらに割合が高くなり、94%の登山者が知っ

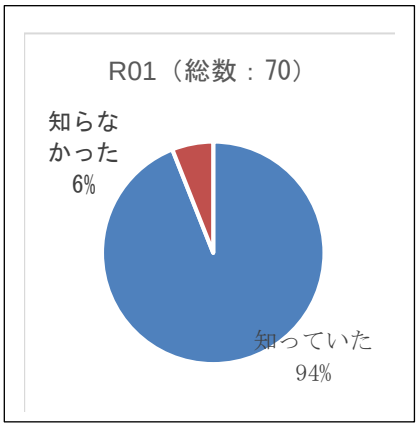
ていると回答した。情報の入手先としては、「ヤマレコ等を含むインターネット」、「雑誌・書籍」から情報を得たという人が多くなっているが、その他の手段・媒体を利用しているという回答が得られたことから、様々な場面での普及啓発の成果が出ていると考えられる。

（トムラウシ南沼野営指定地の携帯トイレに関するアンケート調査）

Ｑ　南沼では携帯トイレの利用をお願いしていることをご存じでしたか？







〈周辺施設における携帯トイレの販売開始〉

トムラウシ山周辺地域においては携帯トイレを入手できる場所がなかったことから、平成 29 年７月より新得町のトムラウシ温泉、新得ステラステーション（JR 新得駅構内）、岡本スポーツに協力いただき、携帯トイレの販売を開始した。上士幌町のひがし大雪自然館においても同時期に販売が開始された。また、令和元年からは、大雪山国立公園周辺のセイコーマート４店舗（新得町では屈足店）及び、セブンイレブン新得町南店で携帯トイレの販売を開始した。コンビニエンスストアでの携帯トイレの販売は、プロジェクトの開始当初から意見が出ていたため、取り組みの大きな成果と考えられる。今年度も新得町内における携帯トイレの販売数は 200 個を超えており、携帯トイレを使用する登山者が増えていると思われる。

（２）トムラウシ山南沼野営指定地利用者に対する現地でのアンケート調査

平成 29 年度から平成 30 年度は、携帯トイレの普及状況を把握するとともに、登山者意識を理解し、問題解決に向けた有効な手法を探るため、現地に赴きアンケート調査を実施した。２年間のアンケート調査により、南沼野営指定地において山のトイレ問題を解決するためには、携帯トイレブースが１基では足りないということが結論づけられ、令和元年７月に携帯トイレブースを増設した。

このことから、令和元年度の現地アンケート調査は携帯トイレブースが増設されたことに関する意見や、改善すべき点なども合わせて調査した。

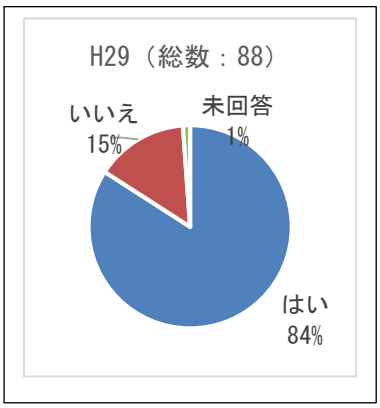
〈調査実施日〉

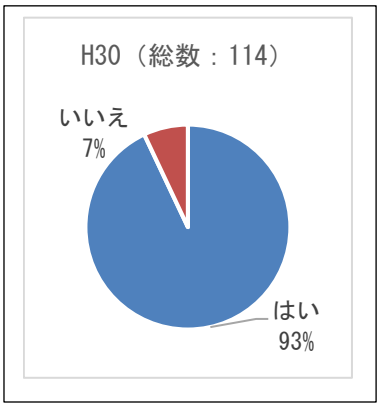
H29			H30		
日付	担当	回答数	日付	担当	回答数
7/15（土）	十勝総合振興局	88	7/14（土）	新得山岳会	114
7/16（日）	上川総合振興局		7/28（土）	山のトイレを考える会	
7/25（火）	上士幌自然保護官事務所		8/4（土）	十勝山岳連盟	
7/29（土）	山のトイレを考える会		8/12（日）	上士幌自然保護官事務所	
7/30（日）	新得山岳会		8/18（土）	新得山岳会	
8/5（土）	十勝山岳連盟		9/1（土）	十勝山岳連盟	
8/19（土）	新得山岳会		9/15（土）	十勝総合振興局	
			9/16（日）	上士幌自然保護官事務所	

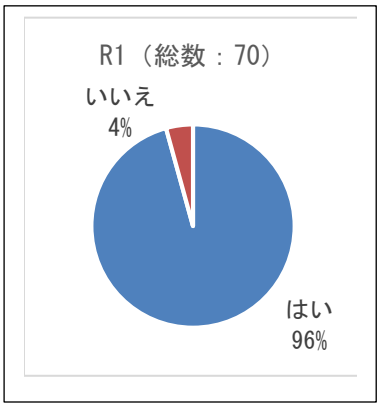
R1		
日付	担当	回答数
7/20（土）	十勝山岳連盟	70
7/21（日）	新得山岳会	
7/22（月）	新得山岳会	
7/23（火）	新得山岳会	
8/4（日）	十勝総合振興局	
8/5（月）	新得山岳会	
8/11（日）	上士幌自然保護官事務所	
8/26（月）	新得山岳会	
8/31（土）	山のトイレを考える会	

アンケート調査について

Q　今回の登山で、南沼に携帯トイレを持ってきましたか？



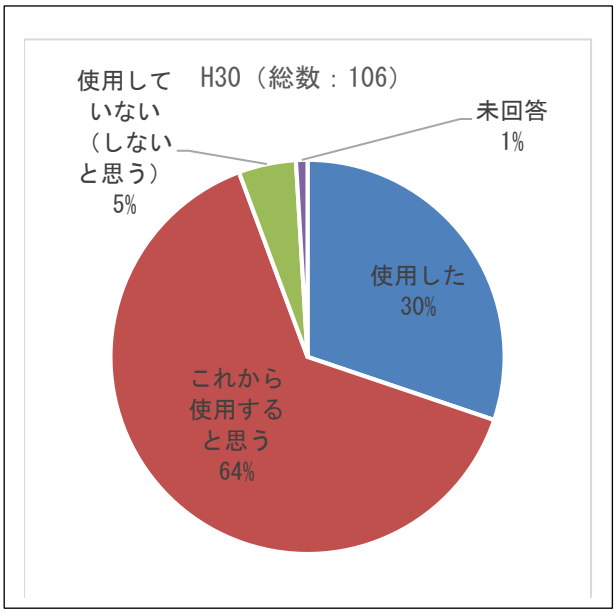


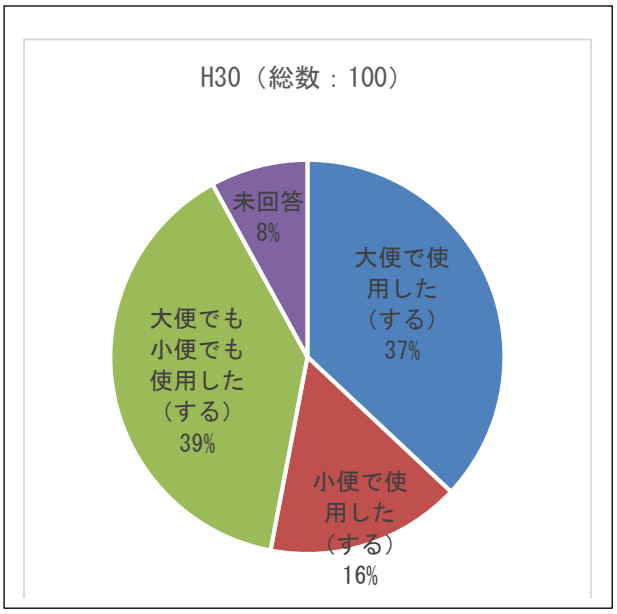


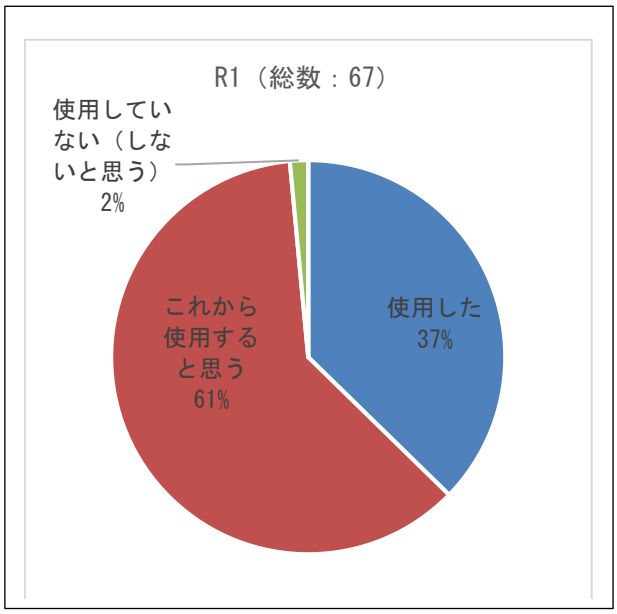
平成 29 年のプロジェクト開始当初から、携帯トイレの持参率は 84%と高かったが、平成 30 年度は 93%、令和元年度には 96%と非常に高い状況となっている。南沼野営指定地に宿泊している登山者のほとんどが携帯トイレを持ってきている状況となっており、持参率も毎年上昇している。携帯トイレの購入先は、圧倒的に登山用品店が多い結果となっているが、登山口の売店や宿泊施設で購入したという回答もあることから、現地で携帯トイレが必要なことを知り、購入した人もいた。現地での情報提供や、現地で購入できる仕組みが利用されたことにも大きな成果があったと考えられる。

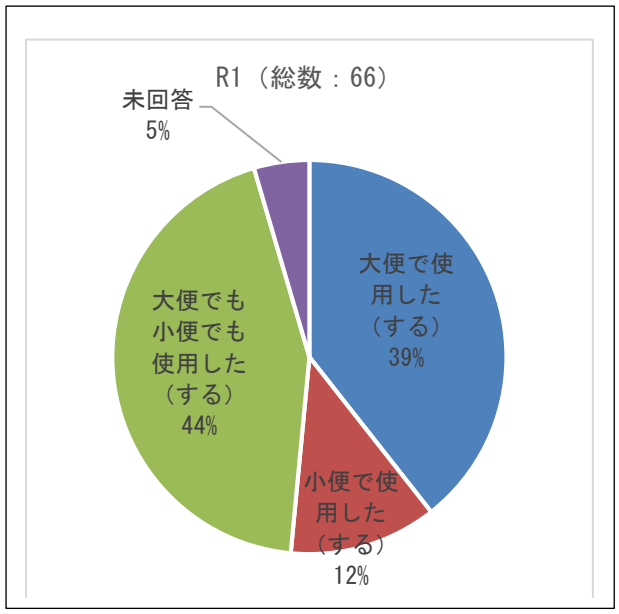
Q　南沼で携帯トイレを使用しましたか？

Q　使用した（またはこれから使用する）場合、それは大便ですか、小便ですか？









携帯トイレを持参した人のうち、携帯トイレを使用した（これから使用する）人の割合は、平成 30 年度は 95%、令和元年度は 98%となった。携帯トイレを持って行ったが、使用しないという人は減少傾向にあり、携帯トイレの使用が定着している。

しかし、使用した（これから使用する）と回答した人のうち、大便で使用すると回答した人は約４割であるが、言い換えると、その人たちは小便では携帯トイレを使用せず、南沼野営指定地周辺に直接排泄していると考えられる。小便のためにトイレ道を利用している人がいるとすれば、トイレ道はなくならない。小便についても携帯トイレブースを利用させ、南沼周辺への小便の残置をなくす必要がある。

加えて、携帯トイレブースの横や、野営指定地の中で小便をしている登山者が多く見受けられ、アンケート調査には「不快である」という意見が寄せられている。女性登山者も多くいることから、見える場所、宿泊する場所等での小便はマナー違反と考えられ、対策を進めていかなくてはならない。

また、アンケート調査は、東大雪荘にアンケート用紙を設置する形でも実施していたが、そこでのアンケート用紙の回収数は 40 枚だった。回答者の中には、日帰りの登山者も含まれており、日帰りの登山者は、携帯トイレを使用しないという回答が多かった。日帰りのため、排泄をしないという考え方であるが、小便はしていると考えられ、日帰り登山者にも携帯トイレを使用してもらうことを検討していかなくてはならない。

（３）　携帯トイレブースの増設について

増設は、新得山岳会に荷揚げや設置の作業を担っていただき、令和元年７月に南沼野営指定地に２基目の携帯トイレブースが設置された。携帯トイレブースの増設は、短期的には当該プロジェクトの最大の目標であったため、３年目にして、最初の目標を達成することとなった。

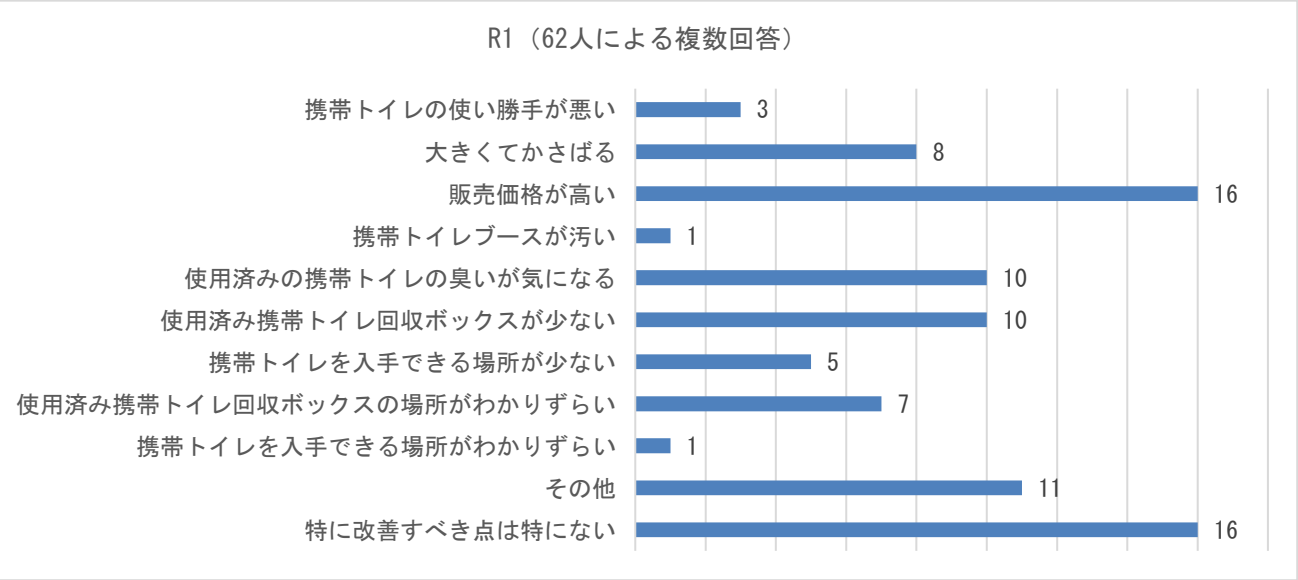
増設に当たっては、既存の携帯トイレブースの課題に対策するため、様々な工夫がなされている。携帯トイレを使用するためには、ある程度のスペースが必要であることから、広さを確保し、棚なども設けた。また、携帯トイレブースまで来てから使用中であることが判明し、外で待つのを嫌って、トイレ道を利用して排泄するという行為を防ぐため、遠くから見ても使用の可否を確認することができるよう、「空き」「使用中」の札を設置している。更に、強度を高めるため、内側に建築資材を内張し、長期間快適に使用できるような様々な工夫を行っている。便座も清潔感があり利用しやすいものを使用し、床部分も清潔感を感じ、清掃もしやすいように現地の石を敷き詰めている。

既存の携帯トイレブースも内張による補強、使用中等の札の設置、便座の交換を実施し、老朽化対策のため、ペンキ塗りも施している。

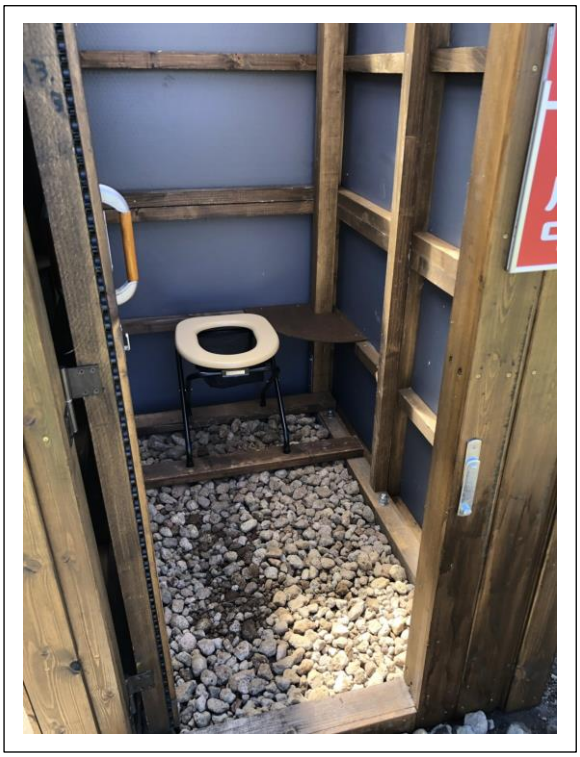
シーズン当初から２基体制で稼働することができ、アンケート調査によると、使い勝手が良かった等の肯定的な意見が多かった。携帯トイレに関する不満を聞いた設問では、「携

帯トイレブースに関する不満や改善すべき点は特にない」という回答が多く、増設により登山者の利便性は向上し、携帯トイレの使用が促進されていると考えられる。

Q　携帯トイレに関する不満や改善すべきと思う点はありますか？（令和元年度新設）



（新設されたトイレブース）



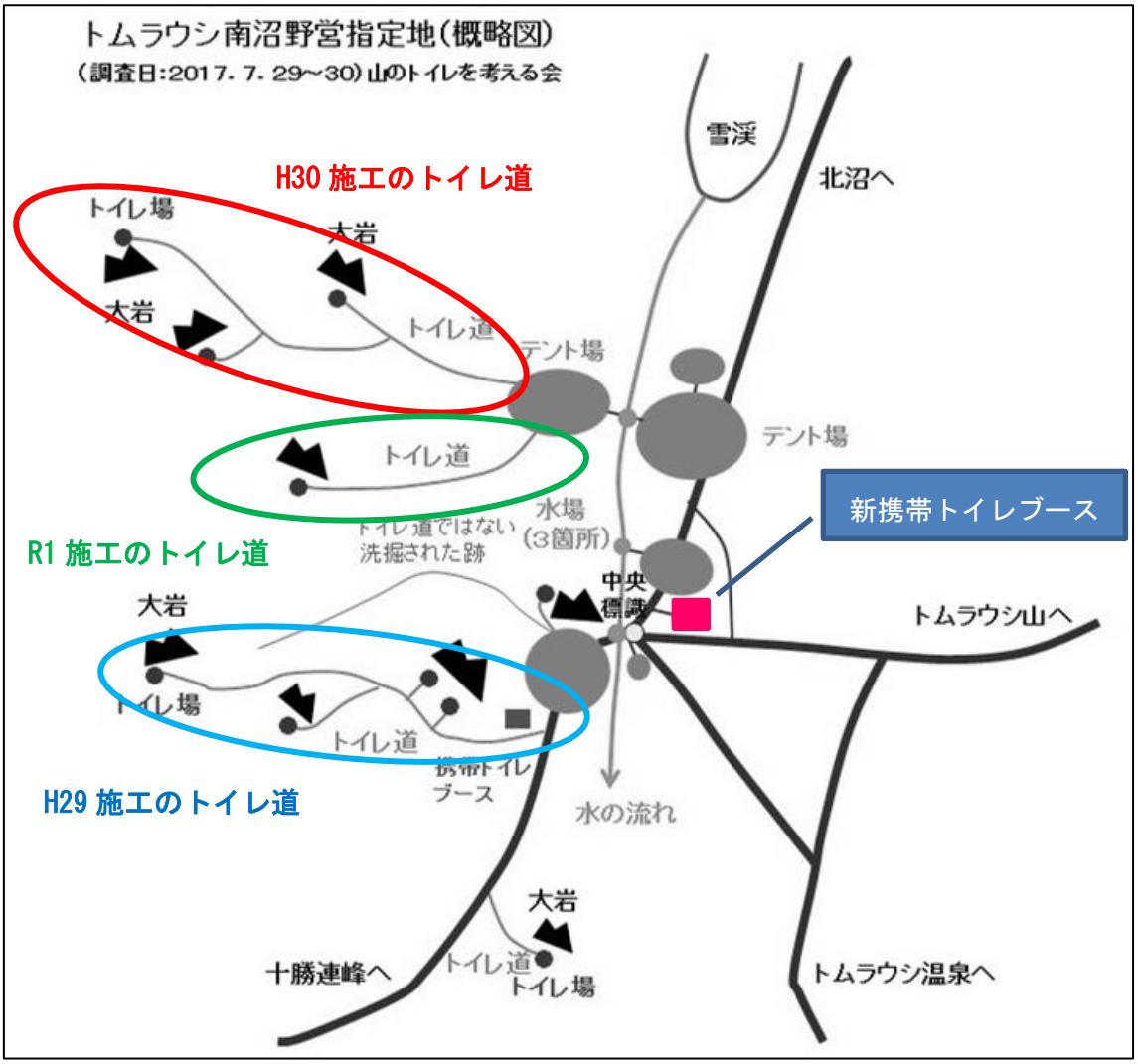
（清潔感と利便性を考慮した内装）

（４）　植生復元事業について

当該プロジェクトでは、トイレ道についても対策をしており、平成 29 年度から令和元年度まで毎年、トイレ道の植生を復元する事業を実施している。トイレ道は、登山者が岩陰に隠れて排泄をするために、野営指定地を外れて植生に踏み込んでいくことにより土地が裸地化し、いつの間にかできてしまった道のことであるが、南沼にはトイレ道が多数存在している。

人為的な作用により悪化した自然環境を本来の状態に回復させることを目的とした事業であるが、トイレ道があることで、登山者が「ここは入ってもいい場所だ」と認識してしまい、トイレ道が利用され続けるという悪循環を断ち切るため、植生を回復させ、トイレ道を利用させない環境整備も目的としている。

（トイレ道植生復元施工場所）



３年間の植生復元事業により、大きなトイレ道への施工は完了したが、経過を観察し、植生の回復状況を継続して見ていく必要がある。再度施工が必要な場所があれば対応し、長期間モニタリングする予定である。

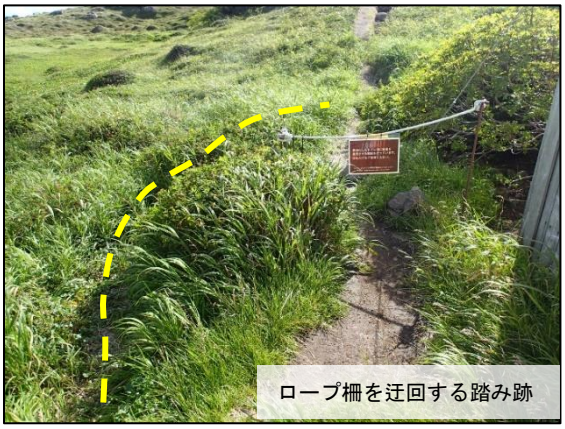
植生復元活動の様子

ヤシネットマットによる施工

トイレ道の植生復元活動の成果と課題

ヤシネットロールにより土留めをした箇所では、土壌のたまった場所から発芽した新芽が見られるなど、植生復元の兆しが見られるが、平成 29 年度、平成 30 年度に施工したトイレ道は、依然として多くの登山者に利用されており、立ち入りの防止には至っていない。また、トイレ道の入口に設置したロープ柵を迂回するように新たな踏み跡もできており、立入禁止措置についてはさらなる工夫が必要である。施工した状態の場所を踏みつけていく登山者がいることは悲しい現状であるが、今後も粘り強く取り組み、登山者のマナー向上につなげていきたい。

ヤシネット上に発芽した新芽

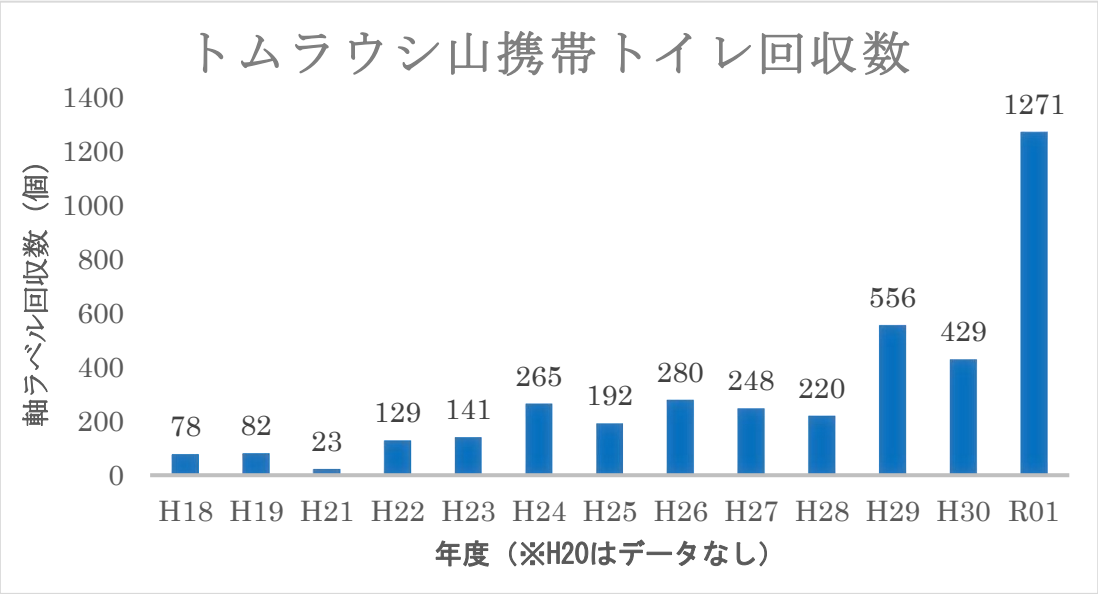


ロープ柵を迂回する踏み跡

【３年間の活動を通して】

トムラウシ山登山口における携帯トイレの回収数を見ると、取組を始めた平成 29 年度は 556 個の回収があった。前年の倍の回収数となっており、プロジェクトの効果がすぐに現れた。令和元年度の回収数は 1,271 個となり飛躍的な増加となっている。令和元年度に増加した要因の一つは、携帯トイレブースの増設である思われるが、３年間のプロジェクトの取り組みにより、トムラウシ山では携帯トイレを使用しなければならないというルールが登山者に浸透し、大きな成果につながっていると考えられる。

３年間の様々な調査により、南沼の野営指定地にはどれだけの人が野営しているのか、携帯トイレの使用について、登山者はどのように考えているのか等、今まで不明だったことが見えるようになり、対策につなげることができている。関係機関が集まり、取り組みを進めていることも大事であり、それぞれの役割を担うことで、継続した取り組みとなっている。



【今後の検討課題】

１　小便の野外排出への対策

小便については、「不快感を与える」、「臭いの問題」などマナーの点でいかがかといった意見が見られるようになってきている。また、小便の問題はティッシュペーパーの残置等は少ないので見逃されていたが、トイレ道の悪化を招くことから対策が必要となってきている。

２　現地で携帯トイレを調達できる仕組み作り

トムラウシ山は早朝から登り始める登山者が多く、現地で携帯トイレが必要と知っても、お店が開いていないため、その場で携帯トイレを入手できないという課題がある。この課題に対策するため、令和２年度は、現地で携帯トイレを入手する仕組みを構築する。携帯トイレを持ってこなかった人も、短縮登山口で携帯トイレを入手することができれば、南沼野営指定地での野外排出は更に減少させることができる。プロジェクトメンバー全体で運用方法を検討しており、令和２年度にこの取り組みをスタートさせる。

３年間で多くの事業を実施してきたが、継続が何よりも大変なことである。継続しなければ、３年間のメンバー全員の努力が無駄となってしまうので、長期的な展望も持ち続け、今後も活動を続けていく。